

-ing 節と -ed 節を中心にした非定形節の研究

上 村 俊 彦

Non-finite Clauses with Special Reference to *-ing* and *-ed* Clauses

Toshihiko UEMURA

Abstract

This article deals with English non-finite clauses by referring to the Course of Study by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, English grammar books, ELT course books published by UK publishers, and recent CEFR-based publications. Examined in detail are *-ing* and *-ed* clauses found in the British Academic Written English Corpus.

1. はじめに

Quirk, et al. (1985, p.1271) によると、例1は統語構造が曖昧で複数の意味解釈が可能である。(以下、下線、強調は著者)

1. *The man, wearing such dark glasses, obviously could not see clearly.*

例1の *wearing such dark glasses* は、主語や時制が不定の非定形節 (non-finite clause) であることから例 1 は、先行詞 *the man* を取る関係節の非制限用法 (1a)、あるいは理由または状況を示す副詞節 (1b、1c) として解釈することが可能である。

- 1a. *The man, **who was wearing such dark glasses**, obviously could not see clearly.*
- 1b. *The man, **because he was wearing such dark glasses**, obviously could not see clearly.*
- 1c. *The man, **whenever he wore such dark glasses**, obviously could not see clearly.*

例1を1bまたは1cのような従属節と解釈した場合、例1は例2のように非定形節を文頭に配置することができる。

2. *Wearing such dark glasses, the man obviously could not see clearly.*

このような統語上の多様性を持った非定形節について、英語学習者はどの学習段階でどの程度学習する機会があるのだろうか。本稿では非定形節が学習指導要領、英語学習教材、ヨーロッパ

共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages, 以下、CEFR) ベースの学習カリキュラムでどのように取り扱われているか検証するとともに、イギリス英語の書き言葉コーパス (British Academic Written English) における *-ing* 形と *-ed* 形の出現傾向について考察する。

2. 非定形節へのアプローチ

非定形節には、*-ing* 節または *-ed* 節、*to* 不定詞 (infinitive)、原形不定詞、動名詞 (gerund) がある。(Aart, 2011, pp.27-28; Biber et al., 2002, pp.259-261; Hands, 2017, p.410; Huddleston and Pullum, 2005, p.303) 非定形節は、生成文法の枠組みで *-ing* 節または *-ed* 節の統語特性や補文構造について考察され (酒井・加藤, 2007; 岩田, 2012)、Aart (2011) では非定形の関係節 (non-finite relative clause pp.199-20)、動詞の補語 (complement) または付加詞 (adjunct) として機能する非定形従属節 (non-finite subordinate clause) として考察されている。(pp.203-239)

以下、文部省学習指導要領と英語学習教材における *-ing* 形と *-ed* 形の取り扱い、イギリスの大学生が書いた英文をコーパス化したBAWEにおける *-ing* 形と *-ed* 形の出現傾向について検証する。

2.1 学校英語

表1は学習指導要領の記述をもとに、小学校、中学校、高等学校の各段階でどの *-ing* 形または *-ed* 形関連の英語の文法・統語構造が学習されているかを整理したものである。(文部科学省, 2017a,b,c,d; 2018a,b)

表1. *-ing* 形、*-ed* 形の文構造及び文法事項の学習時期

		小学校	中学校	高等学校
<i>-ing</i> 形を含む動詞句	現在進行形		+	+
	過去進行形		+	+
	現在完了進行形		+	+
	過去完了進行形			+
	形容詞としての現在分詞		+	+
<i>-ed</i> 形を含む動詞句	過去形	(+) ¹	+	+
	現在完了		+	+
	過去完了			+
	受動態		+	+
	仮定法		(+) ²	+
	形容詞としての過去分詞		+	+
節構造	定形関係節 <i>wh-</i> , <i>that-</i>		(+) ³	+ ⁴
	非定形 <i>-ing</i> 節			
	非定形 <i>-ed</i> 節			
	動名詞	(+) ¹	+	+
	分詞構文 (<i>-ing</i> 節/ <i>-ed</i> 節)			+ ⁵

注記

1. 小学校では「動名詞や過去形のうち、活用頻度の高い基本的なもの」を指導するが、文法事項としては中学校で指導される。(文部科学省, 2017b, p.97; 2017d, p.47, pp.49-50)
2. 「仮定法のうち基本的なもの」(文部科学省, 2017d, p.51)
3. 「関係代名詞のうち、主格の*that*, *which*, *who*, 目的格の*that*, *which*の制限的用法」(文部科学省, 2017d, pp.44-45)
4. 新たに「先行詞を取らない関係代名詞*what*」や「非制限用法」関係副詞の用法が加わる。(文部科学省, 2018b, p.38)
5. 『「分詞構文」については必要に応じて扱うこととする。』(文部科学省, 2018b, p.35)

高等学校段階の不定詞学習は、小学校で学んだ*to*不定詞の名詞としての用法、中学校で学んだ名詞、形容詞、副詞、原形不定詞としての用法を「必要に応じて繰り返し扱いながら、その使い方の理解を深めたり別の場面や異なる表現の中で活用したりできるように指導する」とともに、新たに「知覚動詞と共に用いる原形不定詞」を扱うことになっている。(文部科学省2018b p.38)

動名詞については、中学校では小学校で学んだ動名詞を含む文(例*I am good at swimming. I enjoyed fishing.*)も取り上げ、「音声で十分慣れ親しんだ動名詞を読んだり書いたりできるようにしたり、その使い方の理解を深めたりしながら、別の場面や異なる表現の中で活用できるように指導する」ことになっている。(文部科学省2017d pp.49-50) なお、高等学校レベルにおける動名詞学習の深化については、『高等学校学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』では上記を補足する記述がない。

『高等学校学習指導要領』(平成30年3月公示)では、「分詞構文は必要に応じて扱う」ことになっている。¹⁾(文部科学省, 2018b, p.35) 非定形関係節の-*ing*節または-*ed*節については、『高等学校学習指導要領』、『高等学校学習指導要領の解説 外国語編・英語編』の記述を見る限り直接的な言及箇所はない。また、-*ing*節と-*ed*節が、『高等学校学習指導要領』の「(ア)文構造のうち、活用頻度の高い」文構造または文法事項に該当するかどうかについては不明である。(文部科学省, 2018a, pp.218参照)

伝統文法では、動詞+*-ing*は分詞(participle)または動名詞(*gerund*)に分類される。(Zandvoort, 1975, pp.44-47; Curme, 1935, pp.214-217)しかし、近年、記述文法では両者を明確に区別できないという見解が有力となっている。(Huddleston and Pullum, 2002, pp.1220-1222; Quirk, et al., 1985, pp.1066-1067, pp.1290-1292; Swan, 2016, p.93) 高校英語学習者向けの3冊の文法書(豊永, 2009; 宮川他著, 2010; 大西・マクベイ, 2011)のうち、前者2冊では文法概念(「分詞」と「動名詞」)は踏襲されているが、「文法用語からの解放」を唱える大西・マクベイ(2011)では文法用語「動名詞」は使用されていない。(p.4)なお、「分詞構文」は「D動詞句の説明」(p.449)、「E文の説明」(pp.450-451)として同掲書では記述されている。「Chapter 10: 動詞-*ing*形」参照)

2.2 英語学習教材

-*ing*形と-*ed*形は、1) 進行形、完了形・受動態を表す動詞句の要素、2) 分詞由来の接尾辞を持った形容詞、3) 動詞の目的語または補足語、4) 名詞(句)の後置修飾の主要素(head)、5) 主節の前または後に表れる非定形節の主要素として出現する。

海外出版社の英文法学習テキスト(Azar and Hagen, 2017; Cooper and Echstut-Didier, 2015; Foley and Hall, 2012; Swan and Walter, 2011)では、1) -*ing*形は時制の章、-*ed*形は完了や受動態の章、2) 接尾辞(-*ing*, -*ed*)を持つ動詞由来の形容詞は形容詞の章、3) 節動詞+*-ing*形は、節動詞+*to*不定

詞とともに「動名詞(または-ing形)と不定詞」の章、4) 名詞句の後に表れる-ing形または-ed形は形容詞節または関係詞節の章、5) 主節の前または後に表れる-ing形または-ed形は副詞節の章で、それぞれが記述されている。²⁾

海外出版社(Cambridge University Press、Cengage Learning、Macmillan、Oxford University Press、Pearson Education Ltd.など)は、CEFR各レベルに対応した英語学習用テキストを多数出版している。表2は、Pearson Education Ltdの2種類の英語コースブック(*Gold experience*、*Speakout 2nd ed.*) 6冊の文法学習項目について整理したものである。

表2. 英語学習用コースブックの文法コンテンツ

	CEFR	1)	2)	3)	4)	5)
<i>Gold experience C1</i>	C1	U1 ¹ ,4,5 ² ,7 ³ ,8	U8	U2		
<i>Gold experience B2+</i>	B2+	U1,3,5 ³ ,6		U9	U4	U4
<i>Gold experience B2</i>	B2	U1,2 ¹ ,3 ² ,6,8 ³		U5	U9	U9
<i>Speakout advanced plus</i>	B2+ ~ C2	U1,3			U8	U4
<i>Speakout advanced</i>	B2 ~ C1	U1,2,4,5,6 ²		U2	U3,7	U7
<i>Speakout upper intermediate</i>	B1+ ~ B2	U1,2,3 ¹ ,4,6 ² ,9 ³		U8,9	U10	
<i>Speakout intermediate plus</i>	B1 ~ B2	U1,2,3,4		U5		

1. past perfect, past perfect continuous
2. future perfect, future perfect continuous
3. past modals (e.g. *must have deleted*)

各コースブックには、学習ユニットに対応した独立の文法覧があり、過去時制、進行形、完了形、受動態に関する文法記述は、習熟度レベルに応じた内容が6冊すべてに認められた。(表2 1) 参照) -ingまたは-ed接辞の形容詞を取り上げたコースブックは、1冊のみであった。(表2 2) 参照) 非定形の関係節としての-ing節または-ed節に関する用例や概説は5冊のコースブックの文法覧(表2 4) 参照)、その他の副詞節としての-ing節または-ed節の用例や概説は4冊のコースブックの文法覧(表2 5) 参照) で確認された。

CEFRレベルでみると、-ing形または-ed形による関係節、副詞節はB2 ~ B2+レベルを中心としたコースブックの学習項目となっている。(表2 4)、5) 参照)

2.3 CEFR

Trimとvan Ekは、英語学習者の習熟度に対応した語彙、文法事項、Can-Do記述を規定する*Breakthrough*、*Waystage*、*Threshold*、*Vantage*を刊行している。(Trim, J., 2009; van Ek, J. and Trim, J., 1990a, 1990b, 2001) 彼らの研究は、英語多読用リーダーの語彙選択、文法シラバスとして利用された。(Uemura, 2014) また、彼らの研究成果は2001年に公開されたCEFRの基本文献となっている。今日、CEFRの枠組みによる英語研究はBritish Council (www.britishcouncil.org) とEquals (www.equals.org) によるCore inventory for general English (2010 ~)⁴⁾、CUPのオンラインプロジェクトEnglishProfile (www.englishprofile.org 2011 ~)、CUPが出版するEnglish Profile Studyシリーズ(2012 ~)における研究成果として参照できる。

-ing形または-ed形の文法統語特性とそのCEFRレベルについて、Core inventory for general Englishと表2とを比較すると共通点が認められる。両者は、過去完了(進行形)、未来完了(進行形)、

助動詞+完了形、-ing形または-ed形による副詞節などの文法統語特性がCEFR B2を中心に配置されている。(表2、注4) 参照)

CUPのEnglishProfileサイト上のEnglish Grammar Profile Online (以下、EGP Online) は、英語学習者コーパスCambridge Learner Corpus (以下、CLC) をO’KeeffeとMarkが検証した結果をもとに開発されている。(www.englishprofile.org/english-grammar-profile/compiling-the-egp) 以下はEGP Online上で、検索項目“non-finite”、対象CEFRレベルB1～C2で検索した結果のうち、-ing形または-ed形に関するものの要約である。(www.englishprofile.org/english-grammar-profile/egp-online)

リスト1. EGP Online出力結果

B1

We can relax **after working hard** at school.
I read them in the evening **before going** to bed.
I would like to apologise for **not being** able to attend ...
... it will be quiet and **not crowded**.

B2

After having left you, we reached Dublin ...
Using his best smile, Paul asked her ...

C1

They are very expensive, **if compared** with London taxis.
Based on the assessment above, I strongly recommend ...
Not knowing the North of London very well, it took me quite a long time to get there.
Being overworked and badly paid, Polish women are torn between ...
Being invited for an unexpected lunch makes you feel noticed.

C2

Although committed to her job, she successfully maintained her social contacts ...
... as a reward **for having been invited**.
... and with the sensation **of having been rewarded** with one of the ...

EGP Onlineでは、前置詞+-ing形はCEFR B1レベルの前置詞句として、それ以外の-ing形または-ed形による統語構造はB2～C2レベルに分類されている。

Hawkins and Filipovic (2012) は、第2言語としての英語学習者・使用者の文法・統語特性、誤用の有無やその頻度、語選択などの観点からCLCを分析研究し、CEFRレベルの弁別力がある文法・統語特性の抽出をおこなった。(pp.9-11) リスト2は弁別性のある文法統語特性とCEFRレベルについて例示したものである。

リスト2. Hawkins and Filipovic (2012) による弁別性のある文法統語特性

A2

(verbs with an infinitival complement) I want **to buy** a coat.

(postnominal modification)

There are beautiful **paintings painted** by famous Iranian painters. (p.117)

B1

(postnominal modification)

*I put **an advertisement** in the newspaper asking if someone had it...*(p.117)

(verbs with -ing complement) *Maria **saw him** taking a taxi.* (p.117)

(verbs with infinitival complement) *I ordered him to gather my men.*(p.117)

(-ing clause after main clause)

He was sitting there, drinking a coffee and writing something. (p.120)

B2

(-ing clause before main clause)

Talking about spare time, I think we should go to the Art Museum. (p.120)

(it extraposition with infinitival phrase)

... *it would be helpful to work in your group as well.* (p.120)

リスト2からも明らかなように、Hawkins and Filipovic (2012) の-ing形または-ed形による文法・統語特性は、CEFR A2、B1、B2の3レベルに分布している。文法・統語特性をもとにリスト2を整理すると、動詞句(動詞+to不定詞:A2、知覚動詞+目的語+-ing形:B1、動詞+目的語+to不定詞:B1、仮主語itの後のto不定詞句:B2)、関係節(名詞句修飾の-ed形:A2、名詞句修飾の-ing形:B1)、分詞構文(主節の後の-ing節:B1)、主節に先行する-ing節:B2)となる。

EGP OnlineとHawkins and Filipovic (2012)とは、-ing節が主節に先行する文構造、たとえば、

Using his best smile, Paul asked her ... (EGP Online, B2再掲)

Talking about spare time, I think we should go to the Art Museum. (Hawkins and Filipovic, 2012: B2再掲)

をともにB2レベルの弁別特性としている。両者には、EGP OnlineではC1、C2レベル相当の文法統語特性が抽出されているのに対して、Hawkins and Filipovic (2012) ではこのレベルに対応する文法統語特性がないという相違がある。

3. BAWE

BAWEは、イギリスの大学で人文科学、社会科学、生科学、自然科学を専攻する学生が提出した課題ライティング(500語～5000語)を2004～2007年にかけて集め、英語の書き言葉コーパスとして編纂したものである。(warwick.ac.uk/fac/soc/al/research/collections/bawe/)

本稿では、BAWEコーパスの人文科学分野(arts and humanities、以下、AH)のライティング課題(705件;総語数1,886,634語;異なり語48,840語、以下、AHコーパス)を分析対象とした。AHコーパスの出現頻度順リストで最も頻度の大きい一般動詞の-ing形はusing(頻度723;100万語換算0.037;出現課題数336件)、最も頻度の大きい一般動詞の-ed形はused(頻度1,819;100万語換算0.094;出現課題数482件)であった。(表3参照)

表3. usingとusedの出現頻度、出現課題数

	頻度	100万語換算	出現課題数	割合*
using	723	0.037	336	47.66
used	1819	0.094	482	68.369

* usingまたはusedを含む課題が全課題に占める割合

3. 1 using

リスト3はusingを含んだAHコーパスの例である。各例文はAHコーパスからの引用で、パンクチュエーションについては変更を加えていない。(下線、強調は著者。以下、同様)

リスト3

(進行形) *I shall begin by outlining the key terms I shall be using and any assumptions I have made.*

(AH_Philosophy_Essay_1_3019a.xml)

(動詞+using) *There was therefore a greater awareness of trying to **avoid using** swear words and slang.*

(AH_Linguistics_Critique_2_6120a.xml)

(動名詞) *Using simplicity as a guide to truth is seemingly standard practice.*

(AH_Philosophy_Essay_3_0311k.xml)

By using a range of models it is likely that you, as the audience, will relate to at least one of them.

(AH_Linguistics_Essay_3_6174c.xml)

(名詞句修飾) ***Those using it** are seen as educated, successful and superior, yielding to the prestige notion of a standard variety.* (AH_Linguistics_Essay_1_6010b.xml)

(分詞構文) *Using this information we could group the animals into juvenile, sub-adult or adult.*

(AH_Archaeology_Meth_2_6033f.xml)

なお、using (723) には、出現頻度の高いコロケーションとしてbe動詞 (be, is, am, are, was, were, been) +usingによる進行形 (58)、2-gramのコロケーションby+using (80)、of+using (40)、when+using (12) が含まれる。これらがusing全体に占める割合は、進行形 (8.02%)、3つの2-gram (18.26%)であった。(表4参照)

表4. usingの共起関係

	頻度	割合 ²
progressive ¹	58	8.02
by using	80	11.07
of using	40	5.53
when using	12	1.66
total	190	18.26

¹ 進行形 (be, is, am, are, was, were, been+using) の総数

² 3つの2-gramが全出現頻度回数に占める割合

以下のusing非定形節による関係節 (3a、3b) と副詞節 (4a～4c) のように、AHコーパスには多くのusing非定形節が存在する。なお、3a、3bのusing非定形節が修飾する名詞句は強調で示した。

3a. *For this essay I have chosen **two plays**, each using a different approach.*

(AH_other_Essay_2_0024d.xml)

3b. *If **two people using different systems to communicate** understand **each other using those systems** they are speaking dialects of the same language.*

(AH_Linguistics_Essay_1_6010b.xml)

本来、分詞構文の主語は主節の主語と一致する。(Huddleston and Pullum, 2002, pp.1265-6) 主節の主語と一致しない場合、懸垂分詞 (dangling participles)として非適格文とされる。(Swan, 2016, p.115)

AHコーパスには非定形節の意味上の主語が主節主語と一致しない副詞節を持つ分詞構文が存在する。(4a～4c、参照)

- 4a. *VTTR is assessed using a 250 word sample, and once each transcript was analysed a mean score was calculated.* (AH_Linguistics_Resreport_3_6206b.xml)
- 4b. *... but using the corpus it is clear that in reality it tends to be used with words with negative implications.* (AH_Linguistics_Exercise_1_6126b.xml)
- 4c. *Time is referred to throughout the play using figurative language and imagery.*
(AH_English_Essay_1_3066d.xml)

主節主語と一致しない場合でも、*using*節が「発話者の態度」(attitude, Swan, op. cit. p.115) または「発話行為に関する付加詞」(speech act-related adjunct, Huddleston and Pullum, op. cit. p.1266) と解釈される場合には容認可能であり、上記の例はこの範疇に属する。

3. 2 *used*

リスト4は、*used*を含んだAHコーパスの例である。*used* (1819) の多くは、受動態、完了形、2-gramコロケーション (*used+to*) として出現している。*be*動詞 (*be, being, is, am, are, was, were, been*) +*used*による受動態 (818)、*have* (*have, has, had, having+been*) +*used*による完了形 (36) が*used*全体に占める割合は、受動態 (44.97%)、完了形 (1.98%) であった。(表5参照)

リスト4

- (過去時制) *He used satire to present an experience ...* (AH_English_Essay_2_3005e.xml)
- (動詞句の補足語) *... however, the system is easy to be used in computers.*
(AH_Linguistics_Critique_4_6058c.xml)
- (準助動詞*used to*) *It used to be thought that young children required many exposures ...*
(AH_Linguistics_Explan_2_6067e.xml)
- (完了形) *For example Kanzi had used a word, 'strawberry' to refer to multiple purposes ...*
(AH_Linguistics_Essay_3_3125e.xml)
- I have used a rich variety of language semantically related to the instruments...*
(AH_English_Exercise_2_3006h.xml)
- (受動態) *Anderson can be used to support this.* (AH_English_Essay_3_3008d.xml)
- Such views of women have been used by some historians to illustrate England ...*
(AH_History_Essay_2_0040b.xml)
- ...and the 1936 book by Haspels is still being used as the main textbook.*
(AH_Classics_Essay_4_6006i.xml)
- (動名詞) *Instead of being used to emphasize the speaker's membership ...*
(AH_Linguistics_Meth_2_6062a.xml)
- (名詞句修飾) *Another concept used by Swinford and Smith is that of dysphemism.*
(AH_Linguistics_Critique_1_6183a.xml)

表5. *used*の共起関係

	頻度	割合
passive*	818	44.97
<i>have used</i>	20	1.10
<i>has used</i>	4	0.22
<i>had used</i>	6	0.33
<i>had been used</i>	5	0.27
<i>having used</i>	0	0
<i>having been used</i>	1	0.05
perfect total	36	1.98

*受動態 (*be, being, is, am, are, were, was, or been+used*) の総数

2-gramコロケーション*used+to* (412) の*used* (1819) に占める割合は22.65%であった。ただし、*used+to* (412) には受動態や完了形も含まれる。また、3-gramコロケーション (*be, being, been, is, am, are, was, were, get*) +*used+to* (259) が、*used* (1819) に占める割合は14.24%であった。(表6参照)

表6. *use to*の共起関係

	頻度	割合
<i>used to</i>	412	22.65
<i>be used to</i>	105	5.77
<i>being used to</i>	7	0.38
<i>been used to</i>	20	1.10
<i>is used to</i>	49	2.69
<i>am used to</i>	0	0
<i>are used to</i>	29	1.59
<i>was used to</i>	22	1.21
<i>were used to</i>	23	1.26
<i>get used to</i>	4	0.22
total*	259	14.24

**used to*除く

AHコーパスには、先行する名詞句を後置の*used*形が修飾する例が認められた。(リスト4、例5a、例6a参照) 統語構造上、両者は受動態を含む関係節に置換可能である。(5b、6b参照、強調 著者)

- 5a. **The images used are fairly difficult to decode representing the idea of ...**
(AH_English_Essay_1_3108e.xml)
- 5b. **The images which were used ...**
- 6a. **One transcript to be used consists of four female students, whilst ...**
(AH_Linguistics_Meth_3_6206a.xml)
- 6b. **One transcript which will be used ...**

AHコーパスには、非定形節の先頭が*having (been) used* または*used*で始まる分詞構文の例はなかった。ただし、例7aのように接続詞*when*が先行する*used*節による分詞構文は存在した。推測可能な主語が省略された非定形節と主節からなる例7aの統語構造は、主節から主語 (*some words*) と述語 (*be+used*) とを付加した定形の従属節(7b参照)に置換可能である。(Huddleston and Pullum, op cit., p.1110)

7a. *When used in a particular pattern, the meanings of some words can change.*

(AH_Linguistics_Essay_2_6059e.xml)

7b. *When some words are used in a particular pattern, ...*

7aの分詞構文は、「発話者の態度」または「発話行為に関する付加詞」という観点からの意味解釈が可能である。(3, 1参照)

4. 「発話者の態度」または「発話行為に関する付加詞」としての分詞構文

すでに、AHコーパスの*-ing*形または*-ed*形による非定形節には、「発話者の態度」または「発話行為に関する付加詞」と解釈できる分詞構文が存在することをみた。高校生の向けの学校文法書である宮川他著(2010)は、このような分詞構文を「§235.慣用的な分詞構文」として詳細に記述している。(リスト5 参照)

リスト5 宮川他著(2010)の慣用的な分詞構文

「1. 話題の提供・判断の基準など」

based on, talking/speaking of, generally/broadly speaking, granting (that), judging from/by

「2. 接続詞・前置詞への転化」

(接続詞に固定化した分詞)

assuming (that), considering, including, provided (that), seeing (that), supposing (that)

(前置詞に固定化した分詞)

barring, concerning, excepting, including, notwithstanding, excepting, regarding, according to, owing to

(同掲書pp.546-547, p.610, pp.707-708参照)

*Core inventory for general English*では、CEFRレベルの弁別性がある*-ing*形、*-ed*形由来の語句として、B2レベル (*particularly arranging and following up, generally speaking, talking into consideration, depending on, provided that, Following this...*)、またC1レベル (*Supposing...*)をあげている。(注³参照)これらは、日本人学生がB2レベルあるいはその上のレベルの英語学習をめざす際に習熟すべき学習項目として今後検討すべきであろう。

5. おわりに

非定形節が日本の英語教育現場でどのように学ばれているのかについて、文部科学省の『学習指導要領』と『学習指導要領の解説』、英語圏出版社の英文法教科書、英語のコースブックにおける非定形節の取り上げ方を考察した。また、イギリスの大学で学ぶ学生の課題ライティングBAWEのAHコーパスを検証することで、非定形節が実際の英文テキスト中でどのように出現するかについて分析をおこなった。

一連の考察を通じて、CEFRのB2レベルあるいはそれ以上をめざす英語学習者にとって非定形節による英語表現に習熟することは不可欠であることが明らかとなった。ただし、近年のCEFRベースの研究成果によると、名詞句の後に続く-ing形が非定形の関係節と解釈できる英語表現は、B2レベルではなくてB1レベルの習熟項目であった。-ing関係節は、日本人学習者が多様な関係詞の用法に触れる高校英語で十分に学習すべきであろう。英語運用能力をB2レベルに向上させるためには、日本人英語学習者が分詞構文についても習熟することが必要であることが明らかとなった。

注

1. 文部科学省 (2018a) に、「(3) 文法事項の指導に当たっては、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮し、使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるよう、効果的な指導を工夫すること。」の記載がある。(p.638参照) なお、旧学習要領に基づく高校英語教科書における非定形節の用例については、Uemura (2012) 参照。
2. 4) 主節の前または後に表れる-ing形または-ed形は、Murphy (2012) のみが「-ing and to...」章の最終項目 (68 -ing clauses) として扱っている。
3. 以下は、CEFRレベル別にみたCore inventory for general Englishにおける-ing形、-ed形関連の文法統語特性について整理したもの。(North, Ortega and Sheehan, 2017, Appendix D (pp.38-42)、Appendix E (pp.43-71) 参照)

A1

I'd like (p.40)

gerund (p.40) *I'd like to go home.* (p.44) / *I love swimming.* (p.44) / *I don't like waiting for buses.* (p.44)

A2

gerund (p.40) *Walking is the best exercise.* (p.48)

V+V-ing/ to-infinitive; to-infinitive (purpose) *I love playing tennis.* (p.48) / *She wants to go home now.* (p.49) / *I go jogging to get fit.* (p.48)

Ending in -ed and -ing (p.41) *The film was really boring.* (p.50) / *The crowd was already excited.* (p.50)

B1

simple passive (p.40)

past perfect (p.39)

past modals: *should/ might have+V-ed* (p.40, p.56)

B2

all passive forms (p.40)

past modals: *can't/ needn't have+V-ed* (p.40)

past perfect continuous (p.39)

future perfect, future perfect continuous (p.39) *In my job I mainly have to deal with clients, particularly arranging and following up on orders.* (p.58)

-ing clauses *Generally speaking, the teachers are very helpful.* (p.58) / *Taking into consideration the cost of travel, you might not want to buy a flat so faraway.* (p.58) / *We'll stay for a week or two, depending on the cost.* (p.58) /

Provided that there is no rain, the concert will go ahead as planned. (p.58)

Following this he decided to leave the country. (p.61)/ *After working all day and all night he was totally exhausted.* (p.64)

C1

Supposing he had missed his train? (p.65)

References

- Aarts, B. (2011). *Oxford modern English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Alevizos, K., Gaynor, S., and Roderick, M. (2018). *Gold experience student's book, B2, 2nd ed.* Harlow: Pearson Education Ltd.
- Azar, B. S. and Hagen, S. A. (2017). *Understanding and using English grammar 5th ed.* NJ: Pearson Education Ltd.
- Boyd, E. and Edwards, L. (2018). *Gold experience student's book, C1, 2nd ed.* Harlow: Pearson Education Ltd.
- Carter, R., McCarthy, M. (2006). *Cambridge grammar of English: A comprehensive guide spoken and written English grammar and usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clare, A. and Wilson, J. J. (2016). *Speakout Advanced students' book 2nd ed.* Harlow: Pearson Education Ltd.
- Clare, A. and Wilson, J. J. (2018). *Speakout Intermediate plus students' book 2nd ed.* Harlow: Pearson Education Ltd.
- Cooper, A. and Eckstut-Didiker, S. (2015). *Grammar Explorer 3*. Boston: National Geographic Learning.
- Curme, G. O. (1983) *A grammar of the English language*. Essex: Verbatim.
- Downing, A. (2015). *English grammar: A university course 3rd ed.* New York: Routledge.
- Eales, F. and Oakes, S. (2015). *Speakout upper intermediate students' book 2nd ed.* Harlow: Pearson Education Ltd.
- Eales, F. and Oakes, S. (2018). *Speakout advanced plus students' book 2nd ed.* Harlow: Pearson Education Ltd.
- Cambridge University Press. *English Grammar Profile Online*.
<http://www.englishprofile.org/english-grammar-profile/egp-online>
- Foley, M. and Hall, D. (2012). *MyGrammarLab, intermediate B1/B2*. Harlow: Pearson Education Ltd.
- Foley, M. and Hall, D. (2012). *My GrammarLab*. NJ: Pearson Education Ltd.
- Hands, P. eds. (2017). *Collins COBUILD English grammar 4th ed.* Glasgow: HarperCollins.
- Hawkins, J. A. and Filipovic, L. (2012). *EnglishProfile studies 1 criterial features in L2 English: Specifying the reference levels of the common European framework*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, R. (2012). *English grammar in use 4th ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Nesi, H., Gardner, S., Thompson, P., and Wickens, P. (2004). *British Academic Written English Corpus*. In the University of Oxford Text Archive. University of Oxford
<http://purl.ox.ac.uk/ota/2539>

- North, B., Ortega, A. and Sheehan, S. (2017). *British Council-Equals, Core inventory for general English*. British Council/ Equals.
<https://englishagenda.britishcouncil.org/continuing-professional-development/cpd-teacher-trainers/british-council-equals-core-inventory-general-english>
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Harlow: Longman Group Ltd.
- Pearson Education Ltd. (2017). *Global scale of English grammar: Learning objectives for adult learners*. Harlow: Pearson Education Ltd.
<https://online.flippingbook.com/view/876934/>
- Swan, M. (2016). *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Swan, M and Walter, C. (2011). *Oxford English grammar course advanced*. Oxford: Oxford University Press
- Trim, J. (2009) *Breakthrough*. Strasbourg: Council of Europe.
<https://rm.coe.int/090000168077b6af>
- Uemura, T. (2012). "Some remarks on non-finite clauses" in *Journal of the faculty of global communication*, No.13. Nagasaki: University of Nagasaki. pp.271-284.
- Uemura, T. (2014). "Vocabulary and grammar of English graded readers: A corpus-based approach." In *Journal of the Faculty of Global Communication*, No.15. Nagasaki: University of Nagasaki. pp.171-184.
- van Ek, J. and Trim, J (1990a) *Waystage*. Strasbourg, Council of Europe, and Cambridge University Press.
https://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Waystage_CUP.pdf
- van Ek, J. and Trim, J (1990b) *Threshold*. Strasbourg, Council of Europe, and Cambridge University Press.
https://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Threshold-Level_CUP.pdf
- van Ek, J. and Trim, J (2001) *Vantage*. Strasbourg, Council of Europe, and Cambridge University Press.
https://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Vantage_CUP.pdf
- Walsh, C. and Warwick, L. (2018). *Gold experience Student's book, B2+, 2nd ed*. Harlow: Pearson Education Ltd.
- Zandvoort, R.W. (1975). *A handbook of English grammar. 7th ed*. Tokyo: Maruzen Co. Ltd.

(和文)

- 岩田良治(2012)「英語の三つの離接節について」『天理大学学報 第64巻第1号』 pp.1-13.
<https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/3246/GKH023101.pdf>
- 宮川幸久・林龍次郎編 向後朋美・小林千明・林弘美著 (2010)『要点明解アルファ英文法』東京：研究社.
- 文部科学省 (2017a)『小学校学習指導要領 (平成29年3月公示)』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf
- 文部科学省 (2017b)『学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387017_11_1.pdf
- 文部科学省 (2017c)『中学校学習指導要領 (平成29年3月公示)』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf
- 文部科学省 (2017d)『中学校学習指導要領 (平成29年3月公示) 解説 外国語編』

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2018/05/07/1387018_10_1.pdf

文部科学省 (2018a). 『高等学校学習指導要領 (平成30年3月公示)』

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf

文部科学省 (2018b). 『高等学校学習指導要領 (平成30年3月公示) 解説 外国語編・英語編』

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2018/07/13/1407073_09.pdf

大西泰斗・マクベイ, P. (2011) 『一億人の英文法』東京：株式会社ナガセ.

酒井倫夫・加藤あや美 (2007) 「英語動詞の補文構造について」桜花学園大学人文学部『研究紀要』第9号pp.73-82.

https://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii_20180926163012.pdf?id=ART0008243862

豊永彰 (2009) 『英文法ビフォー & アフター』東京：南雲堂